

マリ・パップ＝カルバンティエの『動物学』 — その成立と意義 —

金山 富美

はじめに

フランスの公教育の発展、特に保育・初等教育分野の基盤作りに力を注いだマリ・パップ＝カルバンティエ（以下、P-Cと略記）。彼女が果たした役割とその教育観についてはすでに概観したが¹、“フランス初等教育の母”と呼ぶにふさわしいこの人物の啓蒙家としての姿を、改めて接写する必要がある。その執筆活動は実践教育活動以上に活発で、教科書、読本、教員指導書に加えて『子供の友』を初めとする教育雑誌への掲載論文等、フランス国立図書館の文献目録に9頁にわたってリストアップされている。しかも一時、焚書同然の憂き目に会った作品もありながら、その著作は没後30年以上もの長きにわたり繰り返し刊行されている²。

地方の一保育所長にすぎなかったP-Cを初めて登用したサルヴァンディ以降、時の文相は革新性、知恵、経験等きわめてバランスのとれた彼女の能力を頼んだわけだが、この平民出身の保育所総視学官が希求したものは、“国策としての教育”の必要十分条件を超え、その枠からはみ出す要素を含んでいた。それが彼女の晩年の不遇を招いたのに違いない。一方そのことが、今またわれわれをこの人物に注目させる。

サルヴァンディの思いきった人事はP-Cの処女作『保育所指導指針』を目にしたことが契機であった。その教科書をジョルジュ・サンドが絶賛したこと³もまた思い起こそう。画期的な教育改革を図った文相デュルイは、彼女を女性で初めてソルボンヌの教壇に上らせ、フランス全土の初等教育者を前に教育について語らせた。そして講演録刊行の際には、ヴィクトル・ユゴーからの公開書簡がその序文を飾ったのだ。ユゴーはP-Cの言葉が人々に届ける内容を次のように称賛している。

1 拙稿「マリ・パップ＝カルバンティエとその思想」『女性空間』第23号、日仏女性資料センター（日仏女性研究学会）、2006、pp.63-74。

2 パップ＝カルバンティエは1878年没。彼女の本のアシェット社刊最終出版年は1914年。

3 注1前掲書p.71を参照のこと。

「どうぞ、これからも良きご本を執筆されますことを、他の人々の書物も貴方のご本を鑑みて著わされるようにと祈ります。そして、わが国の学校で、悪しき教育が良きものへ、欺瞞が真なるものへと変わっていくことを希望してやみません。」⁴

たとえ国や時代が人を忘れ去ったとしても、思想は言葉によって後世に残る。歴史の表舞台から引き降ろされたとはいえ、P-C が試行錯誤の教育実践の中で見出し、その身を削って探究し続けたものは、広く人々の許にまで届いた。それは単にフランス教育史の一時期を特徴づけるだけに留まらないものであり、自らが生きる時代への責務を自覚し、社会への問題提起を自らのペンに託した第一線の作家サンドやユゴーをして「素晴らしいもの」「良きもの」「真なるもの」と形容させた何かである。このことについて、本論考では『動物学』を取り上げて考察したい。

1. 動物学に至るまで

『子供のための事物の話』『地理学・博物学、最初の基礎知識』『動物学』『博物誌』…。P-C の教科書はほとんどが博物学と関わっているが、それは一体なぜなのだろう。

博物学は動物、植物、鉱物等、自然物の研究を指し、西欧ではアリストテレス以来、科学として体系化されてきた。フランスでは大革命後、植物園を基礎に自然誌博物館が創設され、18世紀末から19世紀にかけてラマルク、キュビエ、サン＝ティレール、コストといった博物学者が活躍している。当時、海を挟んだ隣の国イギリスでは、ダーウィンが1859年に『種の起源』を出版し、教会や社会保守層から嵐のごとき批判を受け、思想界にも衝撃を与えたことは衆知の通りである。

しかし、この時代背景の当然の成行きとしてP-Cが博物学を初等教育の中に取り入れたと片付けるのは間違っている。なぜなら、1870年代までの教育行政は逆に、一部の上級学校を別としてその学問の必要性をほとんど考慮せず、「博物学は学校教育から追放され、しばしば隔離されたかのよう」⁵な状況だった

のだ。

1833年のギゾー法が初等教育に求めていたものは「道徳・宗教教育、読み方、書き方、フランス語と算術の基礎、計量法」であった。1850年のファルー法に目を移すと、ギゾー法にほぼ準じながら、当該課程の必須科目として一応「物理・博物学的な実用基礎知識」とは記している。1867年の省令ではそこにフランス史と地理を加えるが、「科学に関してはその限りではない」⁶。要するに、労働者の子供を主たる対象とする初等公教育の段階では、一から十まで“実用”、ハウ・ツーでこと足りるのであり、表記上の「博物学」は“もどき”にすぎず、内実は科学の名に値するものではなかったのだ。実用に限定されない科学知識の育成が初等基礎教育に登場するのは、1882年になってからのことである。同年7月28日省令に「事物の学習、日常的な事物の知識、博物学初歩」、そして1887年1月18日省令でようやく「事物の学習と初歩の科学知識を含む」（傍点はいずれも論者）と謳われるようになる。

上記二省令のなか、博物学初歩、また科学知識と並び記載されている「事物の学習」Leçon de choses（「実物教育」と訳すことも可）なる文言に触れておかなければならない。これは物を示し、「感覚しうる現実」から出発させて科学の世界へと誘っていく教育方法⁷を意味するが、実は1880年代に生まれたのではなく、その20年以上前に考案され、保育所（または保育学校）ではすでに実施されていた。考案者はP-Cで、1855年にマレンホルツ夫人が紹介したフレーベル法に想を得、それを歴史・文化的土壌の大きく異なるフランスで適用できる形態・内容に生まれ変わらせたのである。この“事物の学習”を考案者自らが小学校前段階の教育現場に広く浸透させ、効果が十分証明された結果として、彼女の没後十数年の後ではあったが、この方法は小学校教育へ、いわば格上げで導入されたわけである⁸。

“事物の学習”の普及が、その教育法をタイトルに冠して出版された『子供

yeux, Hachette, 1869, Préface-VI.

6 Inspection générale de l'éducation nationale - Groupe de l'enseignement primaire, IGEN, sept. 2000 - janv. 2001, pp.2-3. / Cf. Françoise MAYEUR, Histoire générale de l'enseignement et de l'Éducation en France, Nouvelle librairie de France, 1981.

7 藤井穂高『フランス保育史制度史研究—初等教育としての保育の理論構造—』、東信堂、1997、p.127.

8 行政側が、科学の発達著しい新時代の労働者養成の方策として利用したとも考えられる。

4 Marie PAPE-CARPANTIER, (Conférences sur) L'Introduction de la méthode des salles d'asile dans l'enseignement primaire, Hachette, 1879, Préface.

5 PAPE-CARPANTIER, Zoologie des salles d'asile et des écoles élémentaires - Enseignement par les

のための事物の話』⁹に多く因っていることは、いうまでもない。博物学の発展に刺激を受けた独学の人は、小鳥や猫、ロバなど子供に身近な動物を取り上げた32の短い物語から成る書物を通して、自然物を観察する喜び、その学習に触れる機会を多くの子供に、家庭の中まで届けようとした¹⁰。ただし、“科学的”という点からすれば、まだとても十分な内容とはいえない。「私は、私を取り巻く世界の中の、神の創りたもうたもの全てを愛する。[中略] 神の作品に驚嘆すべき構造を観る。彼ら(=子供)にそれを気づかせて、聡明になるよう [中略] 宗教を信じられるよう導く」¹¹ — 非現実的な作り話や伝統的なカテキスムの厳格さとはすでに無縁ではあるが、ここにはキリスト教的道徳を踏まえ、誠実に積極的に社会秩序を遵守できる子供の育成を第一義に置く保育者P-Cの姿が看取され、子供の精神に科学への関心を芽生えさせるための教育的配慮を施しながらも、全体的に宗教教育的な色合いが強く感じられる。ただし、そのことによって、“事物の学習”の基本概念が、教会と保守派勢力の強い当時であっても比較的寛容に受容された、と考えることはできるだろう。こうして、サンドの表現を借りるなら、子供の「精神を善の観念へと開き」、「純粋さを保ったまま年齢に見合う知性を獲得」¹²させる読本が普及したのだった。

若い女中にこの教科書を用い、「私自身も生徒と同じぐらい楽しいのです」¹³と語ったサンドの言葉から、P-Cの本が果たしたもうひとつの効果を知ることができよう。社会が子供の最良の教育者と指定した母親を初めとする女性に、著者の思惑通り「実際には思うほどには易くない子供との対話」¹⁴の方法を前向きに学ばせたのだ。

『事物の話』から『動物学』執筆に至るまでの十年は、P-Cがデュルイ文相の右腕として公教育改革に関わり、まさに彼女の能力を花開かせた年月である。1867年の万国博覧会期間に実施されたソルボンヌの講義では、男性達(聴衆の

ほとんどが男性であった)の強烈な視線を浴びながら臆することも怯むこともなく、フレーベル法を基礎に10年以上の試行錯誤の末編み出した幾何学教育法をデモンストレーションし、自然が産み出す結晶のような形の「素朴で楽しい遊び道具」は「子供の創造する欲求を満足させるのうってつけ」¹⁵の教材材料である、と情熱的に語りかけた。この時の彼女は、1840年代に身近な物の形を板書して幾何の指導をするよう勧めていた¹⁶時代と比較にならぬほど、人間的に、また教育者、思想家として長足の進歩を遂げ、自らが成しつづることへの自負と、これから為し得ること、為すべきことの確信とその責務とを強く意識している。特に大きな変化といえるのは、子供から、子供の教育者への関心の拡大である。彼女は、幾何学教育は女子教育にも有用だと考えた。実際、その数年前に発表した『砂粒の秘密、あるいは自然の幾何学』は、保育士養成所の学生を対象に、彼女達がそれまで馴染まなかったものを無理なく学べるようにと意図した教科書なのだ。従来の女性教育のあり方を問題視し、その解決策を試行しているのである¹⁷。

さて、この『砂粒の秘密』は幾何学的形体を日常生活や身近な自然の中に発見するよう指導するが、後半部分では特に動物に目を向け、その世界を文字どおり接写・観察し、驚異の形体を紹介している。興味深いのは、たとえば「蜜蜂は直線状の針で毒液をしたたらせるが、曲線からなる二つの器官で蜜をつくり出すのではないのか」¹⁸の例に見られるように、観察が詳細になると比例して、幾何学の世界を超えた内容が付加されることだ。形体の科学に興味を抱かせ、そこで学生の中に芽生えた疑問を光源に関心を放射させ、それが事物の構造やもののあり方までも向かうよう、叙述は展開されている。女子学生が

15 PAPE-CARPANTIER, *L'Ami de l'Enfance* (Le journal des salles d'asile), avril 1868, p.180.

16 PAPE-CARPANTIER, *Conseils sur la direction des salles d'asile*, Hachette, 1846, p.134.

17 ほとんどの学生が、刺繍用の題材や家具や花瓶や家のデッサンは問題ないのに、幾何学的な製図を嫌い、その原理を子供に説明もできなければ正しく教えることもできない状況があった。P-Cはそれを女性における大きな知的、精神的欠如とみなし、その原因は従来の女性教育のあり方に起因するものと考えた：「直線や、器具がなければ書きにくい円などの線、またきわめて抽象的に定義しがたい点というもの」、これら「幾何学の原理は形をなすあらゆるものの基本中の基本であり、また最も芸術的といえるものでもあるのだから、彼女達に愛させる方法を見つけなければならなかった。」

PAPE-CARPANTIER, *Le Secret des grains de sable, ou la Géométrie de la nature*, Hetzel, 1863, p.20.

18 *Ibid.*, p.150.

9 Marie PAPE-CARPANTIER, *Histoire et leçons de choses pour les enfants*, Hachette, 1858. 直訳は『子供のためのお話と事物の学習』。

10 掲載された話は、保育所の「子供に実際に語って聞かせたことのあるものばかり」(注9前掲書、Préface)だった。

11 *Ibid.*, p.18.

12 注3に同じ / Cf. George SAND, *Correspondance*, Garnier, t.XIV, 1965, p.744.

13 同上。

14 注9前掲書、p.7。

「自ら考え、自ら理解して物事を行う習慣を身につけ」¹⁹ するようにとの切なる願いのもとに。

『動物学』は、以上のような経緯を経て発想されたものであることを覚えておこう。それは、『子供のための事物の話』をより科学的に、そしてより教育的効果に配慮した結果であり²⁰、さらにまた『砂粒の秘密』執筆に込めた教育者に対する啓蒙の意図を一層強く表現しているのではないだろうか。

2. 『動物学』の為組

当時の博物学界の分類法を下敷きとし、サルから海綿動物まで多種多様な生き物で構成した5組本(次頁の表参照)『動物学』は、まず『保育所と初等学校の動物学 — 視覚の教育』として発表され、間もなく『学校と保育所と家庭の動物学 — 視覚の教育』と改題のうえ再版される²¹。動物へのこだわりは、「科学その他の勉強に無関心な子供さえも、生きていて、自分と同じように動く動物の表情には感動する」ので「最初に学ぶ博物学に値する」²² からだ。とはいえ、本来児童対象であるはずの教科書になぜここまで多くの、その上フランス、ヨーロッパ以外の地方、はるか遠くの大陸の生き物まで紹介する必要があるのか。

P-C は以下のように答える：なぜなら、「自然の勉強は大きく観ること」と、その中の「個々を検証し、比較すること」の二つの部分を備えなければならない；「ある対象は、他の多くの対象の中にそれ自体の場をもつこと」と理解し、全体を把握しながらそれを「識別すること」が重要なのだ；そうでなければ「狭く限られた見方しか得られない」ことになり、「そんな学習なら無駄である」²³、

と。学習の要諦をこのように認識する P-C にとっては、子供向けの教科書であれ、詳細さ、複雑さ、多様さはむしろあってしかるべき要素なのだろう。しかし、ここにはそれ以上の意味が潜んでいる。

表 『動物学』全5巻掲載の各項目

巻	紹介される動物
I	サル、クマ、アライグマ、カワウソ、ライオン、トラ、猫、ハイエナ、オオカミとキツネ、犬
II	ビーバー、ノウサギ、牛、羊、ヤギ、シャモワ、シカ、トナカイ、ラクダ、キリン
III	豚、イノシシ、カバ、馬、驢馬、サイ、ゾウ、オボッサム、アザラシ、クジラ
IV	ワシ、ミミズク、オウム、ツバメ、雄鶏と雌鳥、七面鳥、ダチョウ、アオサギ、ハクチョウ、鴨と鴛鳥、水鳥(ペリカン、ペンギン)
V	コウモリ、リスとナマケモノ、ハチドリ、クジャク は虫類と両生類(ヘビ、カエル、トカゲとワニ、カメ) 魚類 昆虫一鱗翅目(蝶) / 膜翅目(ハチ、アリ) / 鞘翅目(テントウ虫、コガネ虫) 半翅目(セミ、アメンボ) / 直翅目(コオロギ、バッタ) / 双翅目(ハエ、カ) 無翅 / 脈翅目(ウスバカゲロウ) クモ形綱と多足類(クモ、サソリ、オオムカデ) 甲殻類と環形動物(ザリガニ、ヒル、ミミズ) 軟体動物と植虫(牡蠣、ムール貝、サンゴ、海綿動物) まとめと分類

P-Cの教育に対する姿勢は、子供に対してだけでなく、あらゆる人の能力に対して限定を設けないことと考えられる。いわゆる“～らしさ”や“～に見合う程度”といった先入観や一般的常識を鵜呑みにしたりおもねたりするのではなく、可能性の方を重視し、そこにいかに近づき、その目的を獲得するかの方法を模索するのだ。学習者が“科学”に大きな壁を感じないで親しんでいけるようにと、『事物の話』に準じて、読者が自分を重ね合わせたり何らかの繋がりを見出せるような人物やエピソード²⁴ から導入が行われる。各動物ごとに異なる出逢いの場を設定し、動物の生き生きとした生態を描き(そこでは、動物を取り巻く環境として忘れられたフランスの地域や遠い異国の風景が、そして動物と共に生きるパートナーとして世界の様々な民族も描写される)、登場人物相互の質疑応答の中で説明が加えられ、最後にそれぞれの“お話”に関する質問表 Questionnaire が添えて締めくくられる。この質問表は子供の理解を確認するためのものでも

24 例えばクマの項は、緑日で踊るクマを見た子供が興奮して母親に報告に来るところから始まる。「鈍重なダンス」と題されるなど、魅力的なタイトルも学習者の心を引き付ける。

19 Ibid., p.262.

20 P-Cの“事物の学習”方法について、その用語に対して容認できる「限度を超過する拡がりを与えている」との批判(Ferdinand BUISSON, *Nouveau Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, Hachette, 1911, p.1533)もあるが、それはこの時すでに彼女の中に、一保育指導者としての姿勢以上の、啓蒙家としての問題意識が芽生えていたためであるとも考えられよう。

21 1869年初版は *Zoologie des salles d'asile et des écoles élémentaires - Enseignement par les yeux*、第二版は *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles - Enseignement par les yeux* となる。後者本文に数力所語句の違いが見られる程度で、内容はほとんど変わらない。

22 PAPE-CARPANTIER, *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles - Enseignement par les yeux*, Hachette, 1873, 1ère série, Préface -VI.

23 Ibid., Préface-XI.

あるが、他方、教える側にとってはどこをポイントに導くべきかの指針ともなっている。この指針は指導者が各テーマをいかに解釈すべきかの鍵、つまり指導者自身の理解を助ける役割も果たす。

目次だけでもある程度了解されるように、一巻から五巻へ、最も身近な哺乳類からそれ以外の様々な類へと自然科学の知識が深まると併行して、次第に新しい言葉、しかも高度で、かなり抽象的な語彙が提示されることにも注目したい。著者がそこに込めた意義は、登場人物の一人である村の教師の口を借りて、次のように告げられる — 「言葉は科学に不可欠だ。考えを定着させてくれるからである。ただし、その考えを産み出させるのは事物である」と。このジョフロワ先生は、動物に関する知識を得た子供達が Zoologie や Ornithologie を初めとする聞き慣れない言葉やその語義（ギリシア語起源）に興味を示しはじめたことに満足しながら、教育の現状に対する批判意見さえ述べるだろう — 美しい花々の咲く「庭の入り口に籠を据えて」驚かせ、中に入るのを尻込みさせるのと同様に、「美しい科学の入り口に大仰な言葉を置いて」門前払いにし、「人から科学に対する興味も言葉を勉強したいという意欲も失わせる」；「ものに親しめば、馴染みがなかった言葉も知りたくなり」「難しい言葉も最後に置けば、簡単に思えるのに」と。また先生は子供達に向かって「君達の4倍もの年齢を重ねている人が、ものを知ることを極度に怖れている」²⁵と語る。

このような台詞がわざわざ述べられるのはなぜか。それは、『動物学』を捧げる相手が保育所や学校の児童だけではないという、著者の真意を伝えているのではないだろうか。この本の対象者の射程には確実に大人が含まれているのだ。従って、本書が『学校と保育所と家庭の動物学』と改題されたのには、大きな理由あつてのことである。学校、保育所、あるいは家庭という学舎において、『動物学』という世界の中で子供は学ぶが、彼らに教える大人もまた学ぶ。いや、後者はむしろこの教科書を媒介とした子供とのやりとりの中で、もう一度学び直す機会を与えられるのである。その大人とは、真の教育を与えられなかった人、とりわけ修道女を含む女性保育士・教師であり、また「百科全書的でありながら表層的で」「一見全てを網羅しているようで実は何も理解させないた

25 Ibid., 4ème série, pp.191-192.

めの」²⁶ 伝統的教育で頭打ちされていた多くの女性達 — つまり社会から“子供の教育者”としての役割を担わされながら、それも実は名ばかりで、抽象的な“愛”という言葉以外その方法を教わることなく、例えばミシュレ描くところの息子に対する「称賛者」²⁷、一方で娘に対してはその自己同一化を促す「規範・典型」としての使命を強いられてきた“妻・母・主婦の立場”にある人 — である。

『動物学』は何気ない物語を装いながら、こうした女性達に科学や古典語の知識を与え²⁸、世界のさまざまな民族や文化の情報、相対的な世界観を紹介することによって、自らが観察し、考え、判断し、また批判する能力を授けようとする。あのミシュレでさえも女性を「創造者となる息子」の「生命の乳」、知の冒険者である男子の「家」と決めつけたが、P-Cは、この著名な歴史家・思想家が「自分自身を創り上げてゆく」「真のプロメテウス」²⁹と呼ぶ男性と変わらぬ「力をつける方法」を、女性の内に注ぎ込もうとする。“自然”という名目のもとに、子供の教育者としての役割と無邪気な自然の雑学³⁰とを女性に強いた社会。『動物学』はいわばその逆手をとって、これら認可された二つの要件に従順な風を保持しながら、禁忌された知の冒険へと女性を旅立たせる船となっているのである。

3. 動物学の俯瞰図

『動物学』はその一見単純な形態の内に、複雑で深い内容を取り込んでいる。博物学的、科学的側面はいうまでもなく、社会的、哲学的な要素にも満ちている。例えば序文にはこう述べられる — 「多くの優れた大人達が自然を研究するのに人生を費やしている。[中略]だが、それら偉大な科学も完璧にはほど遠

26 Isabelle BRICARD, *Saintes ou pouliches - L'éducation des jeunes filles au XIXe siècle*, Albin Michel, 1986, p.322.

27 ジュール・ミシュレ『女』、藤原書店、1991, p.77.

28 当時、知育は「婦人」の素養のレベルまでと限られ、その中でも特にはずされていたのは、自然科学と古典語だった。前者は抽象化能力の過度の発達を要求するために女性に有害であるとされ、後者は無意味、不必要なもののみなされた：「女子リセの創設と「女性の権利」 栖原弥生『規範としての文化—文化統合の近代史』ミネルヴァ書房、2003, p.291.

29 注 27 前掲書、pp.78-79.

30 同上、p.127：ミシュレは教育に関して、男子には「力をつける方法」を、他方、「自然と男との優しい仲介者」である女子はその存在自身が「自然」なのであるから、精神に調和をもたらし、その「美しさ」を蘇らせる方法として「自然」を学ぶようにと提唱する。

い。学者はそこで見るべきものをまったく見ず、そこで認識すべきことをまったく認識していない！多くのことを学べば学ぶほど、さらに多くのことを知らないということを知る³¹ — ソクラテスの「無知の知」を想起させるこの言葉は、あらゆる既成概念に対する疑問提起である。

では、学者の目に映らず、彼らが認識していないものとは何だというのか。P-C は、人が自然の研究の中で真に学ぶべきもの、その目的を「神」と「私達自身を一層知ること」³²と答える。この“神”を文字どおりに受け取るべきではない。それは、自然を通して「宗教を信じられるよう導く」と述べていた『事物の話』の頃の“神”とは異なる性格をもつ。無論、デュパンルーを筆頭とする聖職者、保守主義層の説く神とはほとんど関係がない。例えば彼らがこの世において人間 les hommes (≡男)を神の像と定義することに対して、今や P-C は、懐疑的な意見をとるだろう。『動物学』においては、自然を解釈する前提として神を置くのではなく、逆に、“神”と呼ばれる(少なくともキリスト教徒である著者にとってはそう呼ぶ他ない)存在が創ったはずの動物界を眺めることによって神を理解しようとするだろう。また神の問題以上に、動物とこの世界を分かち合っている“人間という動物”を考えていくということが主眼なのだ。本書一巻から五巻へと展開されていく多様な動物世界は大人の鑑賞に耐え、人を考えさせる。『動物学』の内実は、その標題や、子供、母親を主要登場人物とする表向きの特徴から想像されるほどに無邪気なものではない。

P-C は動物 animal を「目に見えない非物質的な何かを内に秘め、それによって動くもの」と定義する。動物のひとつに数えられる人間の場合は「知性と理性を授かった魂」によって、一方、人間以外の動物はむしろ「人間が本能と呼んでいるもの」によって動く生き物なのだと述べる。ただし、後者の生態を詳細に描いていくなか、彼らも愛と呼ぶにふさわしい感情をもち、また人間ほど高くはないにせよ、知性と呼ぶに値する能力や記憶力をもち得ると問題提起する。それを可能にするのは教育である。しかし、教育は、人間と“動物”のいずれにも与えることができる。では、双方を決定的に隔てる最も大きな違いは

31 注 22 前掲書、Préface - XI-XII.

32 「これから眺めるもの [=動物の世界]を通して、私達は、神を、そして私達自身を、一層よく知る術を学ぶだろう！肝心なのはそれだ。」、Ibid., Préface - XII.

何であるというのか。それは人間のもつ「誇りと義務」であり、「知に対する情熱」「自らを教育しようとする意欲」「未来に飛翔しようとする姿勢」、その「美しい能力」ではないのか — P-C はそう語り、さらに読者に問いかける — とするならば、「私達人間の中でも無知のまま、あるいは無知でよいという人」は“動物”どころか「むしろ獣 bête に似ているかもしれない」³³。

P-C が人間を人間である所以とみなす「未来に飛翔しようとする姿勢」。ここに、約一世紀後のボーヴォワールの思想と重なるものを見ようとするのは飛躍し過ぎだろうか³⁴。20世紀の女性哲学者は種々の学問を再検討しながら、「人間とは自然の種ではなく、歴史的観念」であることを説き、女は長きにわたって「その過去や現在の姿」に押し込められ、「女の可能性」は明確にされるどころか否定されてきた事実を証明しようと試みた³⁵。一方、P-C の時代にも歴史的観念が、あるいはまた学者、聖職者、政治家等、時の権威が、ある人間(例えば、彼女が最も身近に接してきた貧しい層の子供達)を社会的階級の中に“種”として閉じ込めてきた。また「神の像」としての“人間”を標榜し、自分達だけが自然から脱した存在と考える男は、女(P-C自身を含め、彼女が最も信頼し、その可能性を期待する対象)を生涯不完全な存在として自然の“種”の中に押し込めた。そして彼女達を無知の軛につなぎ、社会的流動性から除外してきたのだった。『動物学』の学習は、子供に判断力や批判力、つまり人間のもつ「美しい能力」を育み、また女性にはそれを回復させ、彼らの新たな可能性を追求させるものである。

『動物学』では家畜や野生の動物、また「ほとんど動かない生き物で [中略] 動物よりもむしろ植物に似たもの」³⁶を様々な角度から、子供の低い視線、真直ぐな眼差し(子供という登場人物を使って、というべきか)から見つめる。ある時は人間の傍らで不当に貶められる動物を語るなか、動物と同等の扱いを被るものと、そのように扱う側の人間とが浮き彫りにされる³⁷。またある時

33 Ibid., Préface - XIV - XV.

34 P-C の教科書が当時文学とは見なされなかったとしても、それが20世紀に続々と出現した女性作家達の目にまったく触れなかったということがあるだろうか — そんな疑問も湧いてくる。

35 Cf. Simone de BEAUVOIR, *Le Deuxième Sexe* I/II, Folio, 2000.

36 注 22 前掲書、Préface - XIV.

37 「animaux domestiques は、人間と同じ屋根の下で住んでいるということで労働の仲間を意味する。

は、動物の生態や“自然”を利用、または捏造、詐称して、それをある存在に重ね合わせて排除しようとする人間の非人間的な行為³⁸に警鐘を鳴らすだろう。『動物学』は人間学に繋がり、社会学の様相さえ帯びる。

さいごに — あるいは次への橋渡しとして —

初等教育を手探りで探究した P-C は、こうして女性教育にまで辿り着いた。『動物学』という作品は、その対話法も大きな効果を発揮して、学ぶ者とその学習を導く者双方を新しい世界観へと誘っている。われわれは今後、この本で動物界を探訪しつつ他を教え導く女性指導者が、いかなる道程を経ることによって自らの「可能性の発見」を獲得できるのか、という問題に関して、『動物学』の各場面を具体的に取り上げて論じる必要があるだろう。

分析すべきものは多々ある。本小論ですでにごく断片的に解説を試みた動物とその生態についてはもちろんだが、それを包む枠組やエピソード、そして何より作中人物の設定、とりわけ子供に対する語り手とその語る内容に注目しなければならない。なぜなら『動物学』は教科書、指導書というよりも“読み物”であり、P-C の思想、想像力で紡がれた文学とも呼びうる“世界”を形作っている。読み手はそこから豊かで多様な情報を得るだろう。

全 50 の話に最も頻繁に登場する語り手は、母親であることを伝えておこう。しかし、その姿、イメージ、言説は、巻を追うごとに少しずつ変貌していくだろう。間に他の語り手（父親、博士、男性教師など）が挟み込まれ、そのことによって却って人間に対する安直な把握は払拭される。女性が知的にも感情面でも“二級の性”を意識させることはまったくない。作者 P-C の綿密な計算と工夫...『動物学』のすぐ後に執筆された『教師の手引』『女性教師の手引』という 2 冊の指導書が、異なった標題をもちながらまったく同じ内容をもつに至ったのも、こうした流れの中では不思議な結果とはいえない。

決して貶めた表現ではなく、農奴 *serf* や奴隷 *esclave* が意味するものと同じと考えてはならない。[中略] 働きの彼らは正当に扱われなければならない。」 *Ibid.*, p.50.

38 「働かないで消費せざるをえない存在を“無駄飯食い” *bouches inutiles* という理由で殺す“本能”の残酷さ」 *Ibid.*, Sième série, pp.171-172. ; 人間の場合、「その理由は無知だ。偏見に満ちた狭量な精神しかもちえず、旧弊に流されるのである。」 *Ibid.*, 1ère série, p.62.

[Résumé]

Qu'est-ce que la *Zoologie* de Marie Pape-Carpantier ?

Fumi KANAYAMA

Marie Pape-Carpantier, pédagogue et inspectrice générale des salles d'asile est aussi l'auteur d'une quarantaine d'ouvrages, parmi lesquels la *Zoologie*, œuvre en 5 volumes étrangement intitulée pour un livre s'adressant à de jeunes enfants. Ce qui nous impressionne est que ses histoires et leçons explicatives sur les animaux parlent de nombreux épisodes très variés hors de la France et de ses anciens territoires, et de surcroît, l'auteur les a rédigés dans un vocabulaire difficilement accessible pour ses élèves d'origine la plus modeste y insérant des notions aussi inconnues que superflues.

Pourquoi et dans quelle intention; la première femme qui prit la parole à la Sorbonne et vulgarisa les « leçons de choses » en France, a-t-elle publié cette histoire naturelle ? Quelle science voulait-elle mettre, à la portée de qui plus exactement ?

D'après Victor Hugo, les livres de Pape-Carpantier apportent quelque chose de “bon” et de “vrai” permettant de remplacer le mauvais enseignement et l'imposture de cette époque-là. Nous voudrions élucider sa *Zoologie* ainsi que l'influence que cette œuvre a exercé sur le système scolaire laïque.

